大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

死についての文字学的考察：魂と骨の観点から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-05-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大形, 徹 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004526

死についての文字学的考察

―魂と骨の観点から―

大形　徹

はじめに

小論は「死」という文字の文字学的な考察を通して、古代の「死」のもつ意味をとらえようとするものである。甲骨文の文字の構成をみれば「死」は「歹」と「人」からできている。『説文解字』では人が（死んで）骨にかわるという説をとる。たとえば『大辞典[1]』の「死」も、まずその説を紹介して「死　［解字］會意歹卽ち殘骨と人とを會せ、人の壽命つきて骨となる義」と述べる。この説明によれば人は死後、たんなる物質としての骨に変わるようにみえる。けれども、「死」という文字の構成を虚心にとらえたとき、その形は本来、人が骨に拝礼している姿であって『説文解字』のいうような説にはなりえないのである。またその際、骨はたんなる物質ではなく、当時の死生観にもとづいて、死者の霊魂が付着しているものと考えるべきであろう。歹の甲骨文は骨の上に卜の文字の載る形だが、これは死者（祖先）の霊魂が意志を示しているともいえる。

神仙思想の仙人の話の原形ともいえる尸解仙は、「殯」の状態の時に、僊人として生まれ変わるものである。殯とは遺体の肉体を腐敗させて「骨」にする葬法の名残りであると考えられる。「殯」については稿を改めて考察するが、その前提としてここでは「骨」について考察しておきたい。「骨」は神秘的なものと考えられたようだが、それは死者の霊魂がよりつくと考えられたからであろう。

一、骨をのこすこと

遺体を腐らせ骨だけにする葬法はそれほど珍しいものではない。世界各国をみわたしても、いわゆる風葬とよばれるものの中には肉体を風化させて骨にすることをその目的としているものが多い。おそらく肉体が腐敗したのちにもなお存在する骨こそが死者の霊魂のよりどころであると考えられたからであろう。

だが骨もまた腐敗する。その速度は肉体の腐敗と比べれば遅いものの、条件によっては意外と短期間に消滅してしまう。「殯」は複

葬の一形式とされている[2]。それは肉体を腐敗させる葬法だが、同時にまた骨を腐敗させないための葬法ともいえる。骨だけをのこすという意味が儀礼化し、形式化したものであろう。骨だけをのこすという意識は台湾や沖縄などの洗骨儀礼にものこっている[3]。日本の場合も、たとえ火葬[4]であっても骨上げをして骨壺に骨をいれる。インドの火葬のように完全に灰になるまで焼くことによって魂が昇天できるという考えはない[5]。

このことについて加藤常賢は次のように説明する[6]。

古代では今日の如く、呼吸が息み、心臓の鼓動が止まつたことを死とは言はなかつた。中国古代では呼吸が絶えると、これを風雨に曝して肉が腐り果てて骨骼だけになつて、骨が眞白になつたのを「死」と言つた。

骨と肉体の関係をつきつめていうならば、肉が完全に剥落しなければ「死」とはいえないのであろう。

二、死

ここで「死」および「葬」という文字に目を転じて考察する。

「死」は甲骨文では「㞢」の形であらわされる。偏の「占＝夕（がつ・のこりぼね）」もまた独立した文字である。

『説文解字』四下では、

列骨の残なり。半冎に从う。

とされる。

「列」は「分解なり[7]」とされ、「残」は「賊なり[8]」とされるが、「賊」は「敗る[9]」の意味である。つまり「列骨の残なり」は、バラバラに分解された骨の残欠、すなわち残骸の意味となる。

「冎」は『説文解字』四下に人の肉をそぎ落とした頭隆骨とされる。この文字については後に、もう少し詳しく考察するが、「半冎」は、それが半分になった形である。「残」は「敗」と解されているので、肉が腐敗し、骨だけになったものと理解することも可能だろう。

ただし段玉裁は「列骨の残なり」の「残」に注釈をほどこして、「残、當に菽に作るべし」とする。「殠」は『説文解字』四下に「禽獣の食らう所の餘なり」とされる。この「月」は、「にくづき」であり、「肉」につくる版本もある[10]。つまり動物が食い散らした残餘の骨ということになる。

『孟子』滕文公上に埋葬の起源を説く有名な話がある。

蓋し上世、嘗て其の親を葬らざる者有り。其の親死さば則ち舉げて之れを壑に委つ。他日、之れを過ぐるに、狐狸之れを食らい、蠅蚋姑[11]之れを澀う。

滕文公篇では、このあと、たまたま後日、通りがかった子供がこの様子を見て人情としてたえられず、すきやもっこで土をかけて親の遺骸を覆った、と続いていく。

この話はおそらく孟子の想像より出た話であって確たる根拠を有する話ではないだろう。しかし、上古の世の「葬」をかなり的確に描写しているのではないかと思われる。

「葬」は草むらに死体を遺棄することを示す文字とされる[12]。死体をそのように遺棄すれば、むしろ禽獣が食い散らし、蠅がたかり、ウジがわき、虫に食われてしまうのが当然である。

『説文解字』四篇下にみえる「歹」系列の文字には「歺」が「腐なり」、「殣」が「腐気なり」、「殯」が「爛なり」とされ、いずれも死体が腐敗していく様子を示しているようである。このような様子は孟子のいうようにおぞましい状態とも解しうる。

しかし、肉体が腐敗し、白骨に化していくことは、むしろ、死者の魂が祖霊となっていく過程をしめしているとも考えられる。おそらく孟子の時点では、すでに甲骨文などにみえる古代の宗教的な感覚は失われていたのであろう。

「死（𣦼）」は、『甲骨文字典』によれば、

人、朽骨の旁に拝するを象り、以て死の義に會す[13]。

とされ、残骨を拝んでいる様子である。他の字形をみても「𣦼[14]」は傍らの人が側身形で立っている様子で、「𣦼[15]」は尸のようにみえ、また「𣦼[16]」は跪いているようにみえる。これらの残骨は当然、人骨である。

『説文解字』四下は、「𣦼（死）」について、

澌くるなり。人の離るる所なり[17]。

と説明する。

「離」とは、後出の段玉裁の注釈を参考にすれば、肉体から魂が離れていくことと解される。「澌」は水が尽きるという意味であるが、ここは、「命」が尽きるという意味と関連させているのだろう。

さらに、「死」と「澌」の発音の類似[18]も意識しているようにみえる。

「人の離るる所」というのは、「㞢（死）」という文字の右側の「匕（ヒ）」の部分が「人」というところからの説明でもある。そのため、文字の構造を説明しているようにみえるが、そう解した場合、「人の離るる所」がどのような意味となるのかはよくわからない。

後漢、劉熙の『釋名』釋喪制は、

人始めて氣、絶するを死と曰う。死は澌なり。就ち消澌するなり[19]。

と説明する。

「気」すなわち呼吸の絶えることが「死」である、という説明である。

『禮記』曲禮下の「庶人曰死」につけられた鄭玄の注では、

死の言、澌なり。精神澌盡するなり[20]。

とみえる。

これも肉体にあった「精神」すなわち「魂」が尽きてなくなること、という説明である。ここでは「死」の文字の構成要素である「歹」や「人」に言及されることはない。

つまり、『説文解字』や『釋名』あるいは鄭玄の解釈など、後漢の時代では、「死」という現象については、魂が離れ去ったり、息が止まるという具合に説明することは可能であった。ところが、文字のもつ本来の意味について構造的に説明することは難しくなっていたということではないだろうか。

『説文解字』の「死」につけられた清の段玉裁の注は、

形體と魂魄相い離る。故に其の字、歹・人に従う[21]。

と述べる。

この場合は、「形体」すなわち肉体と「魂魄」が分離する事が「死」であるという説明である。これも中国における一般的な「死」の概念を述べたものといえるだろう。換言すれば、肉体から魂魄が分離することが「死」であるという概念が先にあり、その概念をもとに「死」という文字を説明しているように思われるのである。

ただし、ここでは「故に其の字、歹・人に従う」と文字の構成要素にも言及している。そして、この場合は、「人」を形体、「歹」

を魂魄と見なしているように思われるが、さきにもみたように「歹」は残骨であるため、その解釈は首肯しがたい。

三、卜の形

ここでもう一度、「冎（冎[22]）」・「歹（占）」・「死（㞢）」の甲骨文の字形を並べて考察してみたい。いずれも内部や上部に「卜」の形がみえる。ところが白川静の『字統』、徐仲舒の『甲骨文字典』、それに于省吾の『甲骨文字詁林[23]』などにひく字義の解説においても、なぜか、これらの字形にみえる「卜」について言及されることはない。

「冎（冎）」・「歹（占）」・「死（㞢）」にみえる「卜」は本来、祖先の骨の上にできる自然な「ひび割れ」をさしたように思われる。祖先は霊魂になったあとも、自らの骨に憑りついている。その祖先の意志が、骨の色やひび割れやなどの目にみえる兆候としてあらわれる、とみなされたのではないだろうか。

ふつうは、この「卜」形は甲骨を灼いた時のひび割れの形と考えられている。そうすると、その場合は人の骨ではなく、亀甲獣骨ということになる。

『説文解字』は亀甲を灼くこととして説明する[24]。しかし亀を灼く形を示す甲骨文字は見えない。「冎[25]」つまり牛の肩胛骨などの骨版の上に文字が契まれているもの[26]は多数みえる。「冎」の内部の点は、あるいは文字ではなく、骨の裏側にほった「鑽」である可能性もあるだろう。そうであるならば肩胛骨を灼いている字形となる。

さて甲骨文字が卜骨の上に刻まれるようになったのは、それほど古いことではない。はじめはただ骨を灼くだけであった[27]。これはおそらく、犠牲を生で食べることだけでなく、火を使って調理するようになったことと関わっているのであろう。犠牲を焼いて調理した時に、骨にあらわれる「ひびわれ」に神の意志をみたのであろう。

甲骨文が刻まれる以前の卜骨[28]には猪・犬・羊・牛・鹿などの獣骨[29]が多い。亀もみえるが、その出現は比較的新しいと考えられている。当初は獣骨を灼くことの方が一般的[30]であり、亀版を灼くことはそのあとに広まったものであろう。殷墟卜辞も初期には牛の肩胛骨が多く、のちには亀が多くなる。おそらく甲骨文字が作られた頃にまだ獣骨を灼くことの方が一般的であったことから、「冎」の文字のみがあって、亀版を灼くことを示す文字はないのだと思われる。

獣骨は本来、犠牲の骨であった。いわゆる犠牲には、「亀」はふくまれない。亀は現代でも食用にされており、古代でも食べられていたと思われる。しかしながら、儒教でいう「五牲（牛・羊・豚・犬・鶏[31]）」の中に亀はなく、亀が犠牲の動物として珍重された様子もない。亀甲が占卜に使われるようになるのは、おそらく、その面積の広さや、簡便さなどが影響していると思われる[32]。

なお人骨を灼いたのかどうかは不明だが、人頭刻字の例はある[33]。この場合、祖先の頭蓋骨ではなく、方国の首領のものとされている。これは犠牲とされたと考えられている。

骨に関しては、祖先の骨と犠牲の骨の二つに分けることができるのである。けれども、どちらも同じく骨ということで、神意は祖先の骨にも犠牲の骨にもあらわれると考えられたのではないだろうか。

四、内臓占いと骨の占い

「卜」という文字は現在では亀卜と結びつけて論じられることが多い。『説文解字』自体がすでにそのような解釈を示していた。しかしながら、亀卜は内臓占いや骨の占いなどの歴史のなかでは、むしろ、もっとも新しくあらわれたものである。ここではそのような起源をたどることによって、このような占いのもつ意味について考察したい。

犠牲を解体したときに動物の腸などをみて占う内臓占いは考古学的には残らない。一方、骨を使って行なう占いは古代の世界中、ほとんどの地域[34]でひろく行なわれ、その痕跡を見いだすことができる。骨は、灼かずに解体したばかりの犠牲の骨の色をみて占う場合と、灼いて亀裂を視る場合とがあった。これは先にも述べたように犠牲を生でささげるだけでなく、火を使って調理するようにもなったことを反映しているのであろう。灼く場合も、全面を焼く場合と、点状に灼く場合とに区別される。後者は「点状有灼法」と呼ばれ、手法的には、最も高度なものとされている。中国・朝鮮・日本がこの「点状有灼法」の区域にあたる[35]。「点状有灼法」の場合は、骨や亀版を保存しておいて、随時、占うことができるという特色をもつ。

いずれも、本来は犠牲の動物の一部分を使って神の意志を知ることができるという考え方に立脚している。神に犠牲という貢ぎ物をまずささげて、そのかわりに未来に起こることを予め教えてもらう、というのが当初の占いの原理であろう。神の前で解体した犠牲の内臓や骨の色をみて、神がそれを気に入ったかどうかをみたのであろう。その後、犠牲を焼いたりした際に、骨のおこす「ひびわれ」が神の意志を示すものとされるようになったのではないか[36]。神の

霊魂が犠牲の骨に作用して、「ひびわれ」という兆候によってその意志をあらわすということになるのだろう。当初は、神が犠牲を気にいったかどうかという単純なものであったのが、しだいに複雑な意志をも示しうるということになったのではないか。占いの結果が思わしくなければ、犠牲の数をふやして占いなおしている。有神論の世界では、神は未来を創りだすもので、未来はあらかじめ神によって決定されている。だからこそ神は未来を告げ報せることができる、という構造になっていると思われる[37]。

五、霊魂と骨の関係

霊魂と骨の関係は次のように理解できる。人が亡くなり、埋葬された時、肉体は腐敗して骨だけが残される。埋葬すること自体、骨のもとに魂がよりつき、いずれ死者が再生復活するとみなしてのものであろう。

貝塚茂樹は、「一般に原始人、古代人間においては、死とは魂魄が肉体を去ることであるとし、死体を完全に保存して置けば、再び霊魂がその肉体に復帰し再生することが可能であると信じ、死体を出来るだけ完全な形で埋葬保存しようとする習慣がある[38]」と述べる。

馬王堆などの特殊な例をのぞいては、実際には肉体は腐敗し、骨だけになる。また殯などの複葬は肉体を腐らせて、むしろ「骨」だけにするための葬法といえ、骨に対しては、特別な感覚があったと思われる。それは霊魂がそこに憑りつくということと関連していると思われる。

さきに「卜」と「骨」の関連する文字を考察したが、「占（占）」（『説文解字』三篇下に「兆しを視て問うなり[39]」）や「貞」（『説文解字』三篇下に「卜問するなり[40]」）などの字形にも「卜」がつく。これらは、いずれも「うらなう」、「とう」などとされるが、下部には「骨」を示す文字はない。おそらく「卜」だけで甲骨を灼いて占う意味をこめているのだろう。

そのような例と同様とみるならば、さきにみた「死（𣦼）」という文字は、人骨の前で獣骨を灼いて占うことを示す文字という解釈もできる。ただし、それはいかにも不自然である。「卜（ひびわれ）」が祖先の骨にあらわれたものと見なすならば、それは灼いたものではなく、風化して自然にできたものではないだろうか。それを見て神意をうかがったのであろう。

六、骨

「冎」について『説文解字』は次のように述べる。

人肉を剔りて其の骨を置くなり。頭隆骨を象形するなり[41]。

頭蓋骨に付着した肉を削り落として、その骨を置く様子だという。朱駿聲は「人肉を鬍し、其の骨を置く。頭隆骨を象形するなり…[42]」と、あえて髪がしらに剔の「鬍」の文字を使う。これは髪をそるという訓があるが、朱駿聲は頭蓋骨に付着した肉ともども髪を剔りおとす意味に解しているようだ。

これをみると許慎および朱駿聲は頭蓋骨に特別な意味を見いだしているようである。ただし、あとにみるように甲骨文の字形をみれば、これは頭蓋骨ではなく、肩胛骨と解した方がよいように思われる[43]。

「骨」は「冎」に「月（肉）」をつけたもの。要するに、肉をそぎ落とす前をいう。『説文解字』四篇下、「骨」も「肉の覆うなり」という。「剔」は「別」の本字で、「分かち解くなり」とされているが、刀で肉と骨に分解することだろう。

この「剔」について『甲骨文字典[44]』は「[45]」・「[46]」といった内部に「卜」を含む字形をあげている。ただし解字は人骨とは言わず、「卜用の牛の肩胛骨の形を象る」と述べる。文字の形からみればその方がよいように思われる。文字の上部「横」は、臼形の骨で下部「凵」は、それにつらなる骨であるとする。また一部に直角に切り取られた形を示す字形「[47]」があるのは、卜骨を整えるときに切り取ったあとであろうという。

『甲骨文字典』の「釈義」には、骨・禍・人名・地名などの例をあげている。

癸巳卜す。㱿貞う、旬に咼亡きか[48]。

などは禍祟ととる例であろう。

これも骨自体が祟るわけではなく、その骨に憑りつく霊魂が祟るという感覚であろう。

「卜」が上にある例もある。「[49]」は、『甲骨文字典』の「解字」に「卜、冎上に在るに従う[50]」とされる。『説文解字』にはない文字で、「釈義」は地名として使われる例を載せるのみである。この文字も骨と占卜の関係を示している。

「[51]（固）」は、『甲骨文字典』の「解字」で、「冎に従い、占に従う。《説文》の占の字と義近し[52]」とされている。つまり骨の中に占の文字があるわけである。要するに骨のひび割れを見て占うことであろう。

「占」自体、さきにみたように『説文』に「兆を視て問うなり」とされており、「兆」すなわち「ひび割れ」を見て占うことである

が、『甲骨文字典』ではとくに「𠦪（固）」について、

卜辞中、多く「王固いて曰く」に作る。並びて兆を視て問うに非ず、乃ち是れ殷王、兆を視て以て吉凶を断ず[53]。

と、殷王が占う場合に特別にこの文字を用いたとする。おそらく正式な占いという意識があるのだろう。そのために、古式の占いを示す字形を使ったのではないかと思われる。

以上、「骨」については、人骨をいう場合と、牛などの肩胛骨を指す場合がある。いずれにしても、たんなる物質ではなく、霊魂が憑りつくことに意味がある。そしてそのことにより、占いに用いられている。

七、頭蓋骨

先にみたように、『説文解字』は「𠙵」という文字を頭隆骨だとしている。その解釈には問題はあるものの、「骨」の中でも頭蓋骨が特殊な意味をもつことを示しているようにも思われる。魂魄の「魄」の声符は「白」である。「白は頭顱の形で髑髏。精気を失って、白骨と化したものを魄という[54]」とされ、白骨化した頭蓋骨をいう[55]。また「偉大な指導者や強敵の首は、髑髏化して保存される[56]」という。これは悪霊よけに使われたとされている。髑髏によりついた霊魂の威力によって悪霊をはらうのであろう。先に考察したように、本来、頭蓋内にあった「脳」こそが魂の住処であったと考えられる。そうだとすれば脳をも含めて肉体が腐敗消滅した時、寄る辺ない魂がもっとも憑りつきやすいところといえば、本来、魂の住処であった頭蓋骨の内部であるとされるのは、ごく自然なことであったように思われる。

『荘子』至樂に路傍に転がる頭蓋骨を枕に眠る話がみえる。

荘子、楚に之きて、空髑髏を見る。…髑髏を援きて枕して臥す。夜半、髑髏、夢に見われて曰く、「子の談ずること辯士の似し。…」[57]。

この話では、荘子は髑髏に悪態をついた後、それをひきよせて枕にして眠る。その夢に死者の魂があらわれて荘子に話しかける。この死者の魂は、その頭蓋骨によりついていたものであろう。

また、頭蓋骨を人の頭にのせ、死者つまりは祖先の霊になぞらえたとされる[58]。頭蓋骨を頭にのせれば、そこにその頭蓋骨の本来の持ち主である祖先の魂が憑りつくからであろう[59]。中国のものではなく、ニューギニアのものだが、「死者の頭骨そのものからつくる實物のデスマスク（挿２４６）や祖先像の製作が多く行われ

る[60]」とある。そこに紹介される248祖先像（コルワル）はオランダ領ニューギニア原住民のもの（図版1）とされるが、木製の

248祖先像（コルワル）オランダ領ニューギニア原住民（図版1）

身体の像の上に髑髏がのせられたものである。身体には骨は用いられておらず頭蓋骨だけが特別視されていたことがうかがえる。なお髑髏の左目には眼球が嵌めこまれている。246は似顔頭骨とされ、ニューギニア、セピク河地方原住民のものである（図版2）。頭骨に粘土のようなもので肉付けされ、その上に刺青がほどこされ、目には宝貝が嵌めこまれ、髪もつけられている。おそらく生前の顔に似せたものであろう。これらはいずれも祖先像とされたようだが、骨とくに頭蓋骨に意味がある。おそらく、祖先の霊魂はその頭蓋骨に憑りつくと考えられたのであろう。

246似顔頭骨ニューギニア，セピク河地方原住民（図版2）

かつての中国にも、この髑髏をもちいた祖先像に近いものがあったのではないだろうか。それはまた魂の入っている頭部を殯の場所にまで運ぶ形だと思われる「僊」等の文字とも関連する。

白川静は「僊」の文字の原形と思われる「囟」に関して、

> 囟し＋臼きよく＋廾きよう。囟に四手を加えている形。〔説文〕三上に「舁は高きに升るなり」とし、囟し声とするが、声が合わず、形義もえがたい。字はまた𦥑に作る。囟は頭骨の象。下に巳（屍体の坐する形）を加えて、屍体を示す。四手を加えて屍を遷し、埋葬することをいう。遷化という時の遷（遷）の初文。道家では遷化してその霊は天に登るとされた。[61]

と述べる。

囟の発音は「し」とされるが、「しん」であろう。囟（しん）は舁（せん）の構成要素の中心部分であり、それは𦥑や僊に通じ、僊となる。この発音が残って仙も「せん」と読むが、本来、囟（し

ん）であったのが転化したものであろう。

八、鬼

頭蓋骨が死者（祖先）をあらわす仮面にとってかわったものが、「鬼（鬼）」という文字であるようだ。「鬼」の字の上部の「由」の部分が仮面だとされる。つまり、「鬼」は仮面をかぶり、「鬼（死者の霊）」に扮装した姿[62]とされる。

『説文解字』では、鬼の上部の「由」は「鬼頭」と解される[63]。この「由」は甲骨文では祭祀の犠牲として用いられたようだ[64]。『甲骨文字典』は、「斬獲する所の敵国の首なり。用て祭品と爲す[65]」と解釈している。羌族などの首が祭祀の犠牲として用いられたようである。要するに甲骨文では「人の首」をさすということであろう。この場合、すでに風化して髑髏化したものとは考えにくい。おそらく切り落としたばかりのものなのだろう。

人の側身形の上に鬼頭である「由」がのせられるものが「鬼」である。白川静は「鬼」を「鬼頭の人[66]」と述べ、「遷は鬼頭の人を遷す意で、おそらく風化した屍を収めてこれを複葬する字。鬼とはもと人屍の風化したものを称する語であろう[67]」とする。

この部分の白川説にはそのまま従えない。先にも少し考察したように、「遷」の上部の「西（⊗）」の部分は、おそらく「脳」をあらわし、「鬼」の上部の「由」とは同じではないと思われる。結果的に由も⊗も頭と脳ということで、ほぼ同様の部分をさすこととなる。

おわりに

以上の考察を簡単にまとめると次のようになる。古代の「死」を考察する時には「骨」の問題を無視することはできない。肉体が腐ったあとにも骨がのこるが、骨とくに頭蓋骨には、もとの魂が憑りつくと考えられた。その考え方は、「白」や「鬼」という文字の上にもうかがうことができる。魂の意志は、骨のひびわれ、という目に見える形であらわされた。ゆえに、それが祖先の魂であれば、祖先神の意志ということになる。魂が骨に憑りつくという属性により、魂は犠牲の骨の上にも、ひびわれ等をおこし、その意志を表す事ができると考えられた。当初は犠牲を気にいったかどうかという簡単なものであったが、しだいに予言的な神意をあらわすものとされていく。その後、犠牲の骨は、似た材質をもち、より面積の広い、亀甲へととってかわられた。そのように考えることはできないだろうか。

魂と肉体の関係は肉体が風化して「骨」となったあとも、依然として密接な関係をたもっているといえる。陶弘景の考えた尸解仙の

中には、骨に肉体がついて仙人となる例がみえる[62]。そのことだけをとりあげれば、いかにも荒唐無稽な話にみえる。けれども、古代よりつづく骨と霊魂との関係を考えれば、そのような展開も首肯されるのである。

註

(1) 平凡社、昭和十年初版、四十九年覆刻版、上巻1901頁。
(2) 白川静『字統』(平凡社、一九八四年)「殯」を参照。
(3) 渡邊欣雄『風水思想と東アジア』(人文書院、一九九〇年)を参照
(4) 斎藤忠『東アジア葬・墓制の研究』(第一書房、一九八七年)二一七～二四五頁、「日本の火葬」を参照。
(5) 『世界の葬式』を参照。
(6) 「中国古代の宗教と思想」(『中国古代文化の研究』、加藤常賢先生論文集刊行会、二松学舎大学出版部、一九八〇年)六二頁を参照。
(7) 『説文解字』四篇下、「列」。
(8) 『説文解字』四篇下、「殘」。
(9) 『説文解字』十二篇下、「賊」。
(10) 『説文解字』四篇下、「肙」の段玉裁の注に「月各本作肉」とみえる。
(11) 焦循の『孟子正義』に従い、螻蛄の意味で解した。
(12) 前掲『字統』五四五頁。
(13) 徐仲舒『甲骨文字典』(一九八八年、四川辞書出版社)四六三頁。象人拝於朽骨之旁以會死義。
(14) 一期。前掲『小屯・殷墟文字甲編』一一六五。
(15) 一期。前掲『小屯・殷墟文字乙編』一〇五。
(16) 一期。前掲『殷墟書契前編』五・四一・三。
(17) 嘔也。人所離。(『説文解字』四篇下、死)
(18) 前掲『字統』三六四頁は畳韻と説明。
(19) 人始氣絶曰死。死澌也。就消澌也。(『釋名』第八、釋喪制第二十七)
(20) 死之言澌也。精神澌盡也。(『禮記』巻第一、曲禮下「庶人曰死」の鄭玄注)
(21) 形體與魂魄相離。故其字從歹人。(『説文解字注』四篇下、「死」の段玉裁注)。
(22) 一期。前掲『小屯・殷墟文字乙編』六四〇八。
(23) 中華書局、一九九六年。

(24)『説文解字』三下に「灼きて亀を剥ぐなり。亀を炙くの形に象る…」とみえ、『説文解字』は亀の例のみをあげている。後に述べるが亀以外に獣骨や人骨も使われていた。『説文解字』に亀のことしかふれられないのは、後漢の許慎の時代にすでに亀だけしか使用されていなかったからだろう。

(25) 一期。『甲骨文合集』二八六。

(26)「象骨版上契字之形（『甲骨文字典』四六五頁）」と、獣骨の上に文字が刻まれている形だとされている。

(27) 日本における卜骨や亀卜はついに文字を刻むことはなかった。日本の亀卜はウミガメを使っているが、対馬や伊豆大島などに残っている。また獣骨では鹿の骨を使う例がある。魏志倭人伝にも卜骨の例がみえ、『古事記』にも「布斗麻邇（ふとまに）」とみえるが、それは太占で、鹿の肩の骨を朱桜の皮で焼いて占う（日本古典文学大系1、倉野憲司校注『古事記』上巻、五五頁、注一六）とされる。ほかに橋口尚武「亀卜について」（千田稔・宇野隆夫編『亀の古代学』、東方出版、二〇〇一年）を参照。

(28) 荒木日呂子「中国新石器時代の卜骨とその社会的意義について」（東洋大学中国哲学文学科紀要、第6号。一九九八年）を参照。獣骨には猪・犬・羊・牛・鹿の肩胛骨の例がみえる。

(29) のちの時代の文献には鶏の骨を使う占いの例などもみえる。

(30)『夢渓筆談』技芸に、西戎が羊の髀骨を艾で灼いて其の兆を見ること（死跋焦）、また羊を殺し、その五臓を視ること（生跋焦）を記す。骨を灼く占いと内臓占いの両方が行われていたらしい。なお『維西見聞録』によれば、蒙古が羊の骨を炙ることも「跋焦」という。

(31)『史記』孝武本紀に、越巫が「蓑を以てト」したことを記す。正義によれば、鶏を煮た後、鶏の両目の上の骨に孔裂ができ、人の形に似れば吉という。

(32) なぜ亀が大量に使われるようになったのかという理由はさだかではない。『中国甲骨学史』は、亀が「神に通じる霊物」であるという、いわゆる「霊亀思想」が、この時すでに産まれていた（呉浩坤、潘悠著『中国甲骨学史』（上海人民出版社、一九八五年）第三章、卜甲と卜骨。五二頁）、と亀に神秘的な力をみている。後世、たしかにそのような面は指摘できる。しかしながら、むしろ、これは亀卜が普遍的になってから、逆に亀に神秘的な力をみたのではないかと思われる。亀の使用には、もっと実際的な理由があったのかもしれない。まず牛などの大型の動物を使うことと亀を使うことの差である。牛の肩胛骨をつかうためには牛一頭を屠らねばならず、亀を使う方がはるかに簡便であるように思われる。亀は南方から進貢されたらしい

（同上、二、甲骨の産地、六七頁）。『尚書』禹貢には、「九江から大亀を納錫す」とみえる。「大亀」は唐の孔穎達の疏によれば、「尺二寸を大亀という。九江の水中に出づ」とみえる。尺二寸は唐の尺度で約37，32センチメートル。周の尺度では、約27センチメートルである。発掘された亀甲の中で最大の腹甲は、長さ44センチメートル、幅35センチメートルとされている。一方、卜骨（肩胛骨）の最大のものは、長さ36．5センチメートル、幅21．5センチメートルとされており（前掲『中国甲骨学史』61頁）、単純に比較しても亀甲の方が広い面積をもつ。骨に文字を刻すという習慣がはじまったとき、広い面積をもつ亀の方が、文字を刻すのに有利であったということではないだろうか。陶器の鼎が青銅にかわるなど、用途は同じでも材質が変化することは比較的多い。骨と亀甲は本来、似たような材質のものであったため、より広い面積をもつ亀へと容易に交替しえたのではないだろうか。中国では、実際上、卜骨は卜甲にとって代わられ、亀を使っての卜占が甲骨を代表することとなる。

（33）李抖「殷墟八頭坑髑髏與人頭骨刻辭」（『中國語文研究』、一九八六年、八期）、荒木日呂子「東京国立博物館保管の甲骨片について―人頭骨刻字についての考察―」（MUSEUM東京国立博物館美術誌、一九九三年）を参照。

（34）新田栄治「日本出土卜骨への視覚」（『古代文化』vol.29、一九七七年）に、モンゴル、中央アジア、北アジア、ヨーロッパ、西アジア、アフリカ、アメリカの例があげられている。

（35）前掲、新田栄治「日本出土卜骨への視覚」、三一～三二頁。

（36）M．ローウェ、C．ブラッカー（Loewe, Michael ; Blacker, Carmen）編『占いと神託（Divination and oracles.）』（島田裕巳［ほか］訳、海鳴社、一九八四年）。

（37）たとえば、後世、『搜神記』巻三に、死をつかさどる神である北斗に、文書に書かれてある十九歳の寿命を九十歳に書き直してもらう話がみえる。これなども寿命という未来が神によって、あらかじめ決定されているという世界観であろう。

（38）「不朽―中国古代人の死後生命観の変遷―」（『古代中国の精神』、筑摩叢書九一、一九六七年）八頁。

（39）視兆問也

（40）卜問也

（41）剔人肉置其骨。象形頭隆骨。（『説文解字』四篇下、冂）

（42）䰜人肉置其骨。象形頭隆骨。（『説文通訓定聲』隨部弟十、冂）。

（43）前掲『字統』三三四頁、「骨」は「残骨」と解す。

（44）四六三頁。「冂」。

(45) 一期。前掲『小屯・殷墟文字乙編』六四〇八。
(46) 一期。前掲『殷墟書契前編』七・六・一。
(47) 前掲『小屯・殷墟文字乙編』三八六四。
(48) 林泰輔『龜甲獸骨文字』一、七、二。
(49) 一期。前掲『殷墟書契前編』八・一四・二。
(50)『説文通訓定聲』隨部弟十。
(51) 一期。前掲『小屯・殷墟文字乙編』三〇九〇。
(52) 三五二頁、従円、従占。與《説文》占字義近。
(53) 三五二頁。卜辞中、多作「王固曰」、並非視兆而問、乃是殷王、視兆以斷吉凶。
(54) 前掲『字統』「魄」。
(55)「白」には定説がないように思われる。徐仲舒主編『甲骨文字典』(四川辞書出版社、一九八八年)八九六頁、「白」は郭沫若の説を採用して、「拇指の形を象る」という。親指の爪は白い部分と二つに分かれるようにみえる。それがあたかも白の字形のようにみえることからの連想であろう。また、わざわざ親指というのは、手足の爪の中で、もっとも大きく、他の爪に対して、伯仲の伯となりうるから、伯の文字にもつながるという。郭沫若の説は『金文叢考』・『金文餘釈』のものである。于省吾主編『甲骨文字詁林』第二冊(中華書局、一九九六年)一〇一八頁、は郭沫若の説を紹介したあと、さまざまな学者の説をのせる。しかしそれらの中で、郭沫若の拇指の爪という説は全く支持されておらず、たとえば高笏之などは、「臆説なり(『中国字例』二・九〇)」と論断している。一方、白川静の「白骨化した髑髏」という説は、白川説自体が『甲骨文字詁林』に全く採用されておらず、中国の学者の中に、その説に加担するものも見受けられない。陳世輝は『佚存五八一』に、正面形の人である「大」の上に「白」がのり、さらに白の上に髪の毛が生えている字体「𦣞」があることをを紹介している。また貌の旁である「皃」が側身形の人の上に「白」が載るものであることを述べ、「白」は人頭であるという。いずれも死者とはみなしていないようだ。私は「白」は、白骨化した頭蓋骨を上から見た形で、白の中心の横画は、頭蓋骨の縫合ではないかと考えている。ただし、そうすると「皃」などの文字の構成上、不自然さがのこる。また同様に頭蓋骨の形とされる「由(𠙵)」との区別も難しい。さらに検討を加える必要がある。
(56) 前掲『字統』「白」。
(57) 荘子之楚、見空髑髏。…援髑髏枕而臥。夜半髑髏見夢曰、子之談者似辯士…。(『荘子』外篇、至樂第十八)
(58) 加地伸行『儒教とは何か』(中公新書、一九九〇年)一七頁を

参照。

(59)『世界美術全集』1（平凡社、一九五一年）九九頁に紹介されるオランダ領ニューギニア原住民の祖先像（コルワル）は木製の像の身体上に髑髏がのせられたものである。身体には骨は用いられておらず頭蓋骨だけが特別視されていたことがうかがえる。かつての中国の髑髏をもちいた祖先像もこのようなものであったのだろう。

(60)『世界美術全集』1（平凡社、一九五一年）九九頁。

(61) 白川静『字通』（平凡社、一九九六年）九五九～六〇頁。

(62)『新字源』（角川書店、一九六八年）の部首解説によれば、人（＝儿。儿は変わった形）が大きな面（田・由）をかぶって、死者の霊魂にふんするさまにより、神霊の意を表わす、とされる。ただし、徐仲舒主編『甲骨文字典』、四川辞書出版社、一九八八年、一〇二一頁、「鬼」の解説によれば、「人身にして巨首の異物を象る。以て生人と異なる有るの鬼を表し示す」とある。しかし巨首が何なのかについては触れられない。

(63)『説文解字』九篇上、「鬼」は、「人の歸する所を鬼と爲す」と、「鬼」と「帰」という音通で説明したのち、「儿に从う。由は鬼頭を象る」とされる。九篇上、「由」も「由は鬼頭なり。象形」という。

(64) 羌方の由、其れ用う（董作賓、『小屯・殷墟文字後甲編』、五〇七）。乙卯卜す。由、十を用う（董作賓、『小屯・殷墟文字後乙編』八八一〇）。丁卯、卜して貞う。由するに其れ雨ふらんか。（金祖同、『殷契遺珠』四三七）等の用例がみえる。

(65) 一〇二三～四頁、「由」。所斬獲敵国之首也。用爲祭品。

(66) 前掲『字統』一四五頁、「鬼」。

(67) 同右。

(68)『眞誥』。

※本稿は平成一四年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））神仙思想の成立に関する研究の研究成果の一部である。